

ガウディ

神の建築家



ガウディ

神の建築家
(1852 - 1926)

© Associació pro Beatificació d'Antoni Gaudí
(アントニ・ガウディ列福運動協会)
Barcelona – 1^a edición – Octubre 2013

© de la traducción, Shiho Miyagi

もくじ

はじめに.....	5
ガウディの生涯.....	6
キリスト教徒としての美德.....	12
人々からみた神聖さ.....	19
列福に向けて.....	23
私的な奉獻の祈りによる恩恵.....	27
私的な奉獻の祈り.....	29
参考文献.....	31

はじめに

1982年の秋、ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世がバルセロナにお越しになりました。ガウディの偉大な建築物であるサグラダ・ファミリア（聖家族贖罪教会、Templo Expiatorio de la Sagrada Familia）より恒例の「お告げの祈り」を捧げられ、こうおっしゃいました。「この教会はまだ完成された作品ではありません。しかし最初から変わらないものがあります。それは私たちにもう一つの建造物を思い起こさせるということです…サグラダ・ファミリアが映し出すのは、生きた石で作られるもの、つまり家族という建造物であります。そこでは信仰と愛が途切れることなく生まれ育っています。あなた方の家族に神の御加護がありますように」

サグラダ・ファミリアはバルセロナを象徴とする建物となり、その姿は世界中に知られ、日々何千もの人々を五大陸から惹きつけています。その非常に独創的な建築スタイルは、「自然」そして「キリスト教信仰」から取り出された様々なシンボルの集大成となっています。

この素晴らしい建築作品であるサグラダ・ファミリア教会の後ろには、世界遺産にも登録された他の宗教的・非宗教的な建造物にも共通する、敬虔な信者としての芸術家の姿と精神があります。それがアントニ・ガウディ・イ・コルネットです。建築家としての自己を疑うことなく、信仰と生き方を同化させ神に栄光をもたらしました。

1915年スペイン教皇大使ラゴネシ司教が作品群を訪れた際、ガウディの説明を聞いてこうおっしゃいました。「あなたは建築におけるダンテです。あなたの作品は石に刻まれた最大のキリスト教叙事詩です」

ガウディの生涯

アントニ・ガウディは 1852 年 6 月 25 日に生まれ、翌日タラゴナ県レウスの聖ペラ教区教会で洗礼を受けました。父フランセスク・ガウディはリウドムス、母アントニア・コルネットはレウスの出身でした。

ごく幼少期から建築家という職業を決定付けたのが、家庭環境でした。レウスにあった父の銅細工工房で、様々な量感や形を思い描いて作業することを学びました。そしてリウドムスの仕事場として使っていた田舎家では、地中海の光、自然のままの岩や動植物を目の当りにして育ちました。彼の素晴らしい作品は常に「自然」から生まれていたのです。

幼い頃患ったリウマチ熱に長い間苦しめられましたが、体格はがっしりとした方でした。しかし 73 歳の時、路面電車に轢かれて亡くなりました。父フランセスクが 93 歳で亡くなるまで元気に過ごしたことを思うと、ガウディも、もっと長く生きることが出来たでしょう。

初等教育を終えるとレウスのエスコラピオス修道会の学校に通い、しっかりとした宗教教育を受けました。その後はバルセロナに移り、現在の大学に当たるバルセロナ建築学校で、一生情熱を捧げることとなる建築の勉強を始めました。

1878 年建築士の資格を得ましたが、その頃にはすでに授業料を捻出するため有名な技師や建築家の助手として働いていました。

人文科学への興味からバルセロナ大学の哲学や美学、歴史の授業にもよく通っていました。またコンサートや舞台、詩、古典文学などの鑑賞や、国の重要な建造物と自然景観の訪問



1924年6月、聖体の祝日の行列でバルセロナ大聖堂を出る
72歳のアントニ・ガウディ

にも熱心でした。そこで得た全ての知識は、より幅広く複雑な意味で建築作品の制作に活かされました。

ガウディにとって「芸術」とは、神が造りたもうた創造物である「真実」と「美」が輝く「自然」を模範として、その法則に従うものなのです。そしてその芸術だけが、人生で唯一の目的となりました。

ガウディ自身は本を出版することはありませんでしたが、彼に関する出版物は何百とあります。また講演をしたこともありません。しかし訪問者や識者から一般人まで興味を持った様々な人々に、幾度となく愛するサグラダ・ファミリアについて語りました。一緒に働く人や弟子たちには人間と信仰の知恵に溢れる助言・格言を残しました。そして彼らはガウディの死後、彼の言葉を集め出版したのです。これらの作品こそがガウディに関する最も重要な資料となっています。

結婚することなく、長生きした父親と孤児で病気の姪という数少ない家族を支え続けました。常に周りに親切だったガウディは、同僚や現場の労働者たちと誠実で変わらない友情を築きました。

1883年、ガウディが31歳の時、少し前から建設が始まっていたサグラダ・ファミリア教会を任されることになりました。プロジェクトは敬虔な書店主ジュゼップ・マリア・ボカベイジャ氏と彼の聖ヨセフ帰依者精神協会によるものでした。サグラダ・ファミリアの建設目的は「眠った信仰心を覚まし、慈悲の心を育て、主の憐れみに寄与する」ことでした。

ガウディは 43 年もの間サグラダ・ファミリアに携わり、彼の芸術と全エネルギーを神の栄光に捧げました。特に最後の十年間はひたすらこの教会の建築に没頭しました。

聖職者との友情も、典礼の原理と教会の社会的教理を同化させる上で非常に重要なものとなりました。精神面で良き助言者となった尊敬すべきビック司教トーラス・イ・バジェス氏、マジョルカ司教カンピンス氏、アストルガ司教グラウ氏、聖テレサ修道会創設者の聖エンリク・オッソ司祭、サグラダ・ファミリア主任司祭ジル・パレス氏、そしてガウディの聴罪司祭であったオラトリオ会アグスティ・マス神父。これらの良き聖職者たちは、キリスト教信仰と社会秩序の捉え方において真の改革者でありました。

ガウディは若い頃からすでにその時代の社会問題を感じ取り、労働者の生活環境を気に掛けていました。彼の探求心はず、スペイン初の労働者所有の工場となったマタロ労働組合として具現化されました。時代が抱える深い社会矛盾は唯物論のメシア思想では救えないこと、しかしキリスト教の社会教理の中には解決の糸口があることにガウディは気づいていたのです。

1910 年コロニア・グエルでカトリック社会週間が催されました。たくさんの高位聖職者が参加し、当時ガウディが建設中であった地下礼拝堂も訪れました。このコロニアはガウディの最大の庇護者にしてパトロン、友人、そして顧客であったエウセビ・グエルの労働者用住宅団地でした。

ガウディは姪が 1912 年に亡くなって以降、グエル公園内の家に一人で住んでいました。そして 1925 年 10 月にサグラダ・ファミリア内のアトリエに引っ越しました。

犠牲を払わずには作品を進めることは出来ないと確信していたガウディは、極度に質素な生活を送りました。祈りと苦行を欠かさず、物質的財産は持たずに貧しく生きました。そしてサグラダ・ファミリアの建設を続行させるために、ありとあらゆる人々に施しを乞い、乞食も同然となったのです。



サグラダ・ファミリア内にあるガウディのアトリエと、普段質素な昼食をとっていた事務机

人生の最後の三分の一は毎日同じスケジュールでした。ミサへの出席後夕方五時半までサグラダ・ファミリアで作業をして過ごし、それからバルセロナ大聖堂そばの聖フィリッポ・ネリ教会まで歩くのです。教会では個人的な祈りを捧げ、精神的な頼りとしていた神父と言葉を交わしました。教会までの長い距離を毎日歩いていたのは、幼少期からのリウマチを緩和するために必要な運動だったからです。

しかし 1926 年 6 月 7 日月曜日、いつもの道の大半を歩き終わっていたところで事故に遭ってしまいます。パイレン通りと交差する付近のグラン・ビア通りで、凱旋門とカタルーニャ広場を結ぶ 30 番線の路面電車に轢かれてしまったのです。駆け寄った人たちはガウディだと気づかず、みすぼらしい身なりを見て聖十字架病院に運びました。

このようにしてガウディは何度か口にしていた自らの願いを叶えることになりました。それはカトリックの慈善病院で神の愛のみに迎えられて貧しく死ぬことでした。

病院では病者の塗油を施され、翌日意識を取り戻しました。最も近い友人たちに囲まれながら臨終の聖体拝領を受け、いくつかの言葉を残すことが出来ました。二日後の 1926 年 6 月 10 日、最期の言葉を口にして亡くなりました。「アーメン。神よ！私の神よ！」

葬式では役人や聖職者から一般市民までがとても長い行列を作り、市全体が喪に服しました。そしてサグラダ・ファミリアの地下にあるカルメン聖母マリア礼拝堂に埋葬されました。神との執り成しを願う人たちが絶え間なく訪れるその場所に、ガウディは今も眠っています。

キリスト教徒としての美德

アントニ・ガウディは欠点も含めた人間の本質を良く理解していました。

まず自分の短所を理解し改善しようとしていました。彼の頑固な性格は出身地であるタラゴナのバッシュ・キャンプ地方の人々に特有のものでしたが、福音にかなった成長を目指して情熱を忘れず、常に神への愛と人々への献身を中心に置きました。カトリックの道徳に忠実であり続けたガウディは、サグラダ・ファミリアの建設のみに集中し始めた頃から、評判の高い若き建築家として享受していた贅沢な暮らしを手放しました。

ガウディの信仰は家族の敬虔さとエスコラピオス修道会で受けた強固な宗教教育に育まれました。母はレウスの守護聖人である慈悲の聖母マリアの熱心な信奉者でした。修道会の学校では、聖母マリアによって受肉しこの世に送り出されたキリストが人類を救済されたという崇高な歴史の価値を学んだ、と後年ガウディ自身が語っています。そのマリア・キリスト学の包括的な真実が、彼の最も重要な建築作品であるサグラダ・ファミリアとして石の上に具現化されました。

聖体拝領などの典礼や私的な礼拝で、ガウディの感受性鋭い魂は神の愛に震えました。そして彼は自らが受けた神の愛を家族や友人、仕事の仲間、祖国の言語と文化への隣人愛に変えていったのです。郊外への小旅行では、カタルーニャ各地の人々や景色、習慣、建造物と直接関わり合いました。根底には心からの犠牲と十字架への愛があったので、宗教的か

どうかに関わらず全ての建築作品の頂きには、シンボルとして十字架が飾られています。

一人の人間としては、彼の人生は成功とは言い難いでしょう。なぜなら計画した素晴らしい作品のいくつかは着工さえ出来ず、完全に完成させたものは一つもなく、多くが批判的となり当時の識者たちの理解を得られなかったからです。ただ、「見抜く力」を持った一握りの友人・芸術家たちと普通の市民、そして子供たちだけがガウディを称えていました。

ガウディはとても信心深い人で、毎日ミサと聖体拝領に通いました。福音を読み込んでいたことは、彫刻の表現にも表れています。「生誕の門」にはキリストの生涯が、そして「受難の門」と「栄光の門」にもそれぞれ福音の場面が描かれています。ですのでガウディがサグラダ・ファミリアについて訪問者に解説すると、その説明こそがまさに教義の伝道となりました。どれだけ宗教と離れた生活をしている人でも、福音とガウディの言葉に深く感動させられました。

ガウディは、教会の最も重要な役目としてカトリック典礼を大切にしました。典礼を基盤として物事を方向づけ、聖母マリアと夫の聖ヨセフを信奉していました。世俗的なものであっても、彼の作品には四方に腕のある立体的な十字架が掲げられています。そしてその多くに聖家族のアナグラムである「JMJ」が刻まれています。イエス (Jesús)、マリア (Maria)、ヨセフ (José) のことです。

ペドレラ (石切り場) の愛称で知られる作品カサ・ミラは元々、ロザリオの聖母へのオマージュとして考えられました。

聖母の伝説が柱に、そして詩的で宗教的な碑文が天井や最上階の外側に刻まれました。またガウディは、大天使ミカエルとガブリエルを左右に配した大きな聖母マリア像を掲げる予定でした。しかしカサ・ミラの持ち主の反対にあい、諦めざるを得ませんでした。もし事前にそのシンボルが反対されていれば、そもそも契約を受理しなかったとガウディは語りました。

ガウディの神学的・道徳的徳は深い謙虚さに基づいていました。そしてその謙虚さを、確信を持って自然に実行していました。彼の類まれなき芸術的才能は、空間において真の形状を捉えるという非凡な能力を以て具現化されました。しかしガウディは自身の才能を常に神の恵みと考え、決しておごりませんでした。

指物職人で装飾家のジュック氏は、名のある木工職人の息子でした。芸術学校の生徒だった彼の父が、級友たちとサグラダ・ファミリアを訪れた時のことです。ガウディ自身が対応し、彼ら学生たちに詳しく解説しました。ジュック氏は語ります。「父は写真を撮ろうとガウディに近づきました。しかしそれを仕草で止めさせ彼はこう言いました。“人間を賛美しようとしてはなりません。栄光は神のものです”」

またガウディの友人で、道徳に関してとても厳しい人がいました。彼は政治や芸術、学問など様々な分野で活躍する人々について調べてまとめようと思いつきました。特に若い世代にとって素晴らしい手本になると考えたからです。彼が作ったリストは非常に長くなりましたが、その内の一人に何

か良くない部分があったことを知ると、その人をリストから消してしまいました。その様にしているとあまりに多くの人
が姿を消し、最後に残ったのは二人だけでした。ある日彼は
ガウディに会い、この件で失望したことを話しました。

「聞いて下さい。こんなにたくさんの人を集めたのに、手本
となり得る高潔な人物は二人しか残りませんでした」

「それは誰ですか」ガウディは聞きました。

「あなたとミジェット先生です」

「それでは私たち二人も消して下さい。ミサのグロリアでこ
う唱えるのをご存知でしょう。 *Tu solus sanctus*—聖なる方は
ただ一人です」

サグラダ・ファミリアの主任司祭ジル・パレス氏の姪であ
ったロザはこう証言しています。彼女の父は兄ジルを訪ね、
義姉パキータが 14 人目を身籠っていることを伝えてこう言
いました。

「ああ！パキータはまた一人産むなんて。かわいそうに！」
すると、そこにいたガウディがこう正しました。

「かわいそうとは！主が私たちに子供を授けられる時、主は
その理由を分かっているんですよ」

ガウディは信仰の希望を生き、神の摂理を信じていたのです。

彼の立派な人生に一つ欠点があるとすれば、気短だという
ことでした。知ったかぶりや自惚れの強い人を前にすると、
鋭い言葉が出てしまうことがありました。しかしガウディは
その短所を自覚して直そうと努力していましたし、冗談も楽
しむ陽気な性格の持ち主であったことには変わりありませ
ん。多くの友人に囲まれ子供たちにも特に好かれていました。

1978年よりサグラダ・ファミリアの建築に携わる彫刻家・外尾悦郎氏の「生誕の門」に関する説明をお聞きになる天皇皇后両陛下。外尾氏の後ろには建築家ジョルディ・ボネット氏。左にはガウディ建築で最も権威のあるジュアン・バセゴダ教授





ロザ・パレスはこうも語ります。「近くで私たちが遊んでいるのを見つけると、アントンおじさんは傍に来て声をかけてくれました。優しい雰囲気、いつものコートから手を出して…私たちは彼のことが大好きですぐ駆け寄っていました。叔母のマリアが“アントンおじさんを困らせてはダメですよ！”と叱ると、彼はこう言っていました。“聖母マリアは子供たちにここにいて欲しいのですよ”」

またガウディは特に貧しさを大切にしました。「貧しさは優雅さと美しさを生みます。富は豊満と問題を生み、美しくはなれません」

さらに英雄のように勤勉で、仕事についてはこのように語っていました。「ふつう人が何かをしている時、ある程度出来ると掘り下げることが諦め、その時点での結果に満足してしまいます。しかしこれは間違っています。何かが出来途中である時、人はその全てを成し遂げられるまで徹底的に努力しなければなりません」また、ガウディはその方がより良い結果になると思った時には、作品の方向性を変更することもためらいませんでした。

部屋に関しても食事に関しても、とても質素な生活をしていました。贅沢な生活を送ると家族の誰かが犠牲になると信じていたからです。特に四旬節の時期には、厳しい苦行と断食を行いました。1894年の四旬節では激しく衰弱し危うく命を失うところでした。

人々からみた神聖さ

ガウディが亡くなった時、既にバルセロナの人々は彼の神聖さと英雄的美徳をしっかりと認識していました。その1926年、大手出版社より『アントニ・ガウディー—人生・作品・死』という本が出版されました。ガウディを称える作家17人の文章を集めたものです。

司教区博物館館長だったマヌエル・トレンス氏は自身の章を「神の建築家」と名付け、神に動かされサグラダ・ファミリアの実現に生涯を捧げたガウディの人物像を描き出しました。建築家J・F・ラフォルス氏は、信仰を切り離してガウディを理解することは不可能であると断言して文章を締めくくりました。

グエル公園にあるガウディの家で家事を手伝っていた女性は、当時見習いの修道女でした。1962年にこう語っています。「彼はまさに聖人でした。考えれば考えるほどそう確信しています。列聖に相応しい人物に違いありません」

フランセスク・バルデイジョ教区司教は「讃歌の友」という宗教音楽団体の創設者で、優れた音楽学研究者でもありました。彼は1915年から色々な場面でガウディに言及しており、1971年4月には雑誌『テンプラ（教会）』に記事の一つ寄せています。その中で「装飾芸術の促進」という団体主催の催しで行った自らのスピーチの最後の部分を、改めて繰り返しています。「次に私が参加するガウディの行事が彼の列福へ向けた手続きの開始を宣言するものであることを、心から願います」それは出席者全員が共有する願いでありました。

このように広く神聖さが認められていたガウディですが、列福への正式な動きはなかなか始まりませんでした。教区聖職者とは違い、複雑な申請手続きの後ろ盾として時間と資金を費やすことの出来る機関がなかったからです。これが一般信者の列福が非常に少ない理由なのです。

そのような事情から、「アントニ・ガウディ列福運動協会 (Asociació pro Beatificació d'Antoni Gaudí)」の設立は熱狂的に歓迎され、国内外のマスコミでも広く取り上げられました。

最初の寄付はウルジェル司教ジュアン・マルティ氏からで、活動に賛成するとの手紙が添えられていました。

バルセロナ副司教ジュアン・カレラ氏は1992年10月20日付『ラ・バングアルディア』紙にこう述べています。「協会設立はもっともな動きだと思います。心から賛同しています。アントニ・ガウディは素晴らしいキリスト教徒で、彼の芸術と信仰を切り離すことは出来ません」

1993年1月アストルガ司教報も、ガウディの列福運動に賛同する記事を載せました。

また前バルセロナ大司教のナルシス・ジュバンニ枢機卿は、建築家ジョルディ・ボネット著『サグラダ・ファミリア教会』の序文で、「この教会はル・コルビュジエに“世紀の建築家”と評された天才、アントニ・ガウディによって生み出されました。全てを建築に捧げた彼の魂は深くキリスト教徒でした。だからこそ作品のほとんどは教会であり、それ以外のものにも宗教的シンボルが用いられているのです。そしてサグラダ・ファミリア教会は神秘的法悦に違いありません」と述べています。



仮設天幕の下行われた贖罪のミサで聖体を拝領するガウディ。
現在はここにサグラダ・ファミリアの身廊が建つ

さらにガウディの模範的人生と神聖さは多くの人々に良い影響を与え続けています。1926年に彼の作品を訪れ研究した有名な日本人建築家・今井兼次氏はカトリック信者となりました。1991年には同じく日本人の彫刻家・外尾悦郎氏も改宗し、カレラ司教の洗礼を受けました。

1996年には幼い頃から「クリスチャン・サイエンス」に属していたアメリカ人実業家チャールズ・ティーター氏がニューヨークでカトリック教会の洗礼を受けました。1998年3月19日には熱心な仏教徒であった韓国・釜山商工会議所長ジュン・ヨンジュ氏が、釜山で開くガウディの展示会を準備する中で宗教的衝撃を受け、神の存在を確信しカトリック教徒となりました。

列福に向けて

ガウディの死から 66 年目を迎えた 1992 年 6 月 10 日、カトリックの団体によって「アントニ・ガウディ列福運動協会」が設立されました。すぐに私的な奉獻の祈りが印刷され、バルセロナ大司教の許可のもと配布されました。まずカタルーニャ語、スペイン語、英語、日本語で、次にイタリア語、ドイツ語、フランス語、ポルトガル語、ポーランド語など、たくさんの言語で準備されました。

1994 年 5 月 13 日、ガウディに関する情報が十分揃ったところで、協会はガウディの亡くなった司教区であるバルセロナの大司教に列福の審査開始を申請しました。申請者である協会が必要経費や手続き等を全て請け負うこととなります。

1998 年 3 月 19 日、サグラダ・ファミリア地下礼拝堂にあるガウディの墓が修復され、寄付を受け付ける募金箱も設置されました。この募金箱は日本人彫刻家・外尾氏の作品です。ガウディが建てた聖家族学校の建物の基礎を模しており、イエス・マリア・ヨセフの心臓三つが交差するデザインです。

同年 4 月 18 日バルセロナ大司教区枢機卿は、サグラダ・ファミリアの主任司祭ルイス・ボネット・イ・アルメンゴル氏をガウディの列福運動の副請願者に任命しました。司祭は列福審査の開始のために、教会法に則った手続きをすぐに始めました。

ローマ教皇庁はまず多数の司教の承諾を得なければならぬと定めています。そのため 1998 年 5 月 5 日カタルーニ

ャ全土の大司教区と司教区を束ねるタラゴナ司教会議が開かれ、満場一致で手続きの開始が承認されました。

1998年9月17日にはガウディの生涯を専門家が分析する目的で、歴史委員会と神学委員会が発足しました。同年10月23日ガウディを個人的に知っていた存命の人々の証言を集める委員も、証言者が高齢であることに配慮しながら個々のケースに合わせて指名されました。

神学委員会の報告書がまとまった1999年12月22日、バルセロナ大司教はローマ教皇庁へ全ての書類を送り列福審査の開始を求めました。2000年2月22日、異例の早さで「*nihil obstat*—何も妨げない（カトリック教会の正式な許可を示す句）」との回答がありました。

最初の手続きが全て終わり教皇庁の許可を得たことで、2000年4月12日にガウディの列福審査は次の段階に入りました。厳かな式がリカルド・マリア・カルラス枢機卿進行のもとバルセロナ司教館で執り行われました。彼に続き副請願者ボネット司祭と審議会が宣誓を行いました。審議会の顔ぶれは、審査員代表のサグラダ・ファミリア修道会ジュゼップ・マリア・ブランケット神父、公証人ヘスス・ディアス・アロンソ神父、公証人代理ウィリアム・オスバルド・アパリシオ修道士、そして公正監視人のジャウマ・リエラ氏でした。

ブランケット審査員代表は書記たちや副請願者ボネット氏の助けを得て、ローマ法の定める司教区における手続きを終えました。このようにして「神のしもべ」と認められたガウディの必要文書全てが集められ、長い質問表を使って証言者約30人が詳しく調べられました。それが終わるとボネッ

ト司祭はバルセロナ大司教区カルラス枢機卿に司教区手続きの終了を申請しました。これが2003年3月13日のことで、2000年と同様、枢機卿の進行により大司教館で式が執り行われました。

3月25日にはシルビア・コレアレ氏が請願者に任命され、5月28日、1024ページに渡る書類が列聖省に提出されました。そして7月9日にローマでの手続き開始を告げる式がミケーレ・ディ・ルベルト副書記進行のもと行われました。ここにはカルラス枢機卿と「列福運動協会」のホセ・マヌエル・アルムサラ会長が出席しました。

2004年2月29日、列聖省の一般委員会が開かれ、バルセロナ司教区が行った調査の有効性が宣言されました。委員会はジョゼ・サライヴァ・マルティンス枢機卿のほか、書記、副書記、列聖調査審問検事と報告者で構成されていました。4月23日にはホセ・ルイス・グティエレス氏が報告者に任命されました。

2009年6月22日、列聖省はガウディの申請の件を、省の報告者代表であるビンチェンツォ・クリスクオーロ神父（カプチン・フランシスコ修道会）の担当としました。これにより、次に提出しなければならない「生涯と美徳、神聖さの評判について (*positio super vita, virtutibus et fama sanctitatis*)」という本の編纂が始まりました。内容は次の通りです。

1. 列福審査・手続きの来歴と証拠書類
2. 証人による証言と、ガウディの人生・作品・神聖なる執り成しに関する書類

3. 関連書籍に関する見解
4. 考証がなされた伝記
5. 英雄的美徳に関する報告書

これらの資料が一冊の本としてまとめられ、歴史委員会、神学委員会、そして最後に列聖省に属する枢機卿と司教の通常議会で審議されます。そこでガウディの英雄的行いが認められると、列聖省長官がローマ教皇に教令への署名を求めることとなります。その署名がなされれば「神のしもべ」ガウディを「尊者」と呼べるようになるのです。この称号は公式礼拝を受けることは出来ませんが、列福に向けて英雄的美徳が公認された証となります。

人々にサグラダ・ファミリア贖罪教会の完成時期を尋ねられると、ガウディはこう答えていました。「私にお任せになった方は急いでおられません」それと同じように列福の手続きがいつ終わるかも、神のみがご存知なのです。列聖省に提出する本には膨大な量の調査が必要ですが、ガウディと同様に私達も急がず取り組みたいと考えています。

数年のうちには前述の報告書が完成し、列聖省に任命された報告者の承認を得られることでしょう。しかし列福が実現するであろう日付を具体的には掲げません。奇跡を前にして、計算など誰も出来ないのです。マタイ伝 24 章 36 節と 25 章 13 節にあるように、神のみがその日とその時を知っておられます。私達はただ備えましょう。ガウディの言葉通り「私達にお任せになった方は急いでおられない」のですから。

私的な奉獻の祈りによる恩恵

列福に向けた手続きや審査が続いている間も、ガウディは神との執り成しを求める信奉者たちにたくさんの恩恵をもたらしています。

ある建築学の学生は学科の単位を全て取り終えた後、何年も卒業制作を完成出来ずにいました。遅れば遅れるほど事態は悪化していったのです。そんなある日母親からガウディの私的な奉獻の祈りが書かれたカードを手渡されました。そこで彼女はガウディに神との執り成しを請うことにしました。するとまもなく卒業制作を一気に完成させ無事合格を貰えたのでした。

友人同士のアウロラとマリア・テレサは手紙にこのように書いています。「マリアはある日ふとガウディの墓を訪れなければならないと感じました。サグラダ・ファミリアの地下礼拝堂に入った時、それまで経験したことのない大きな安らぎを感じました。マリアが私にそのことを話してくれた後、ガウディが私たちに二つの恵みを与えて下さったことが分かりました。腎臓結石が治り仕事も見つかったのです。感謝のしるしとして列福運動への寄付をここに送ります」

バレンシアの建築家の妻は、夫が大きな賞を勝ち取れるようガウディにお祈りをし、「列福運動協会」への多額の寄付を約束しました。正にその通りになったとの手紙と共に寄付が届きました。

オーストリア・チロル州インスブルックの建築学の学生は、学年首席を目指して制作した設計図をなくしてしまい、コピーも持っていませんでした。しかしガウディに祈ると、思い

がけないところから設計図が見つかりました。学校の事務室で行方不明になっていたそうです。

マドリッドの建築家は、大学を卒業した街バルセロナに戻った際ガウディの墓を訪れ祈りました。「その後マドリッドに戻ってから、腸の出血で再手術をしなければならなくなった義兄のために、私的な奉獻の祈りを捧げました。なんと彼はすぐに治ってしまい、もう退院するところです」とのことでした。

バルセロナの別の男性はこう語っています。「49歳の私は、失業しているか、せいぜいその場限りの仕事しかない状態でした。列福審査が始まった翌日、ふとサグラダ・ファミリア教会の前にたたずんでいました。素晴らしい建築に圧倒されていた時、列福審査のニュースを思い出しましたので、もし仕事が見つかったら“列福運動協会”にお知らせしようと誓いました。すると様々な困難も乗り越えられ仕事に就くことが出来ました」

アルゼンチン・サルタの女性も手紙でこう証言しています。「アントニ・ガウディのお恵みに公の場で感謝申し上げます。住む所を見つけられるよう助けを求めると2年も経たないうちにアパートが手に入りました。また息子のペドロは13年ぶりに父親に会うことが出来ました。どうか息子の学業と私の繊維腫の手術のために、再度神へ取り次いでくれますように…」

読者の皆さまにも、ガウディの執り成しを願う私的な奉獻の祈りをお勧めいたします。例えば9日間お祈りを続ける「ノベナ」によって、きっと皆さまの願いが叶うことでしょう。

私的な奉獻の祈り

我らの父なる神よ、あなたはあなたのしもべなる建築家アントニ・ガウディに、創造物への大いなる愛と、幼子の秘跡と受難を表そうとする燃えるような情熱を吹き込まれました。精霊のお恵みにより私にも良い仕事が出来るようにして下さい。また、あなたのしもべなるガウディの執り成しによって私の願いを叶えて下さることにより、アントニ・ガウディに神の栄光をお授け下さい。(願い事をする) 主イエス・キリストの御名にお祈りします。アーメン。

イエスさま、マリアさま、ヨセフさま、我らに平安を与え家族をお守りください。(三唱)

お願いが叶った方、またお祈りのカードや教会のお知らせ、当冊子を追加でご希望の方は下記までご連絡下さい。

Associació pro Beatificació d'Antoni Gaudí
(アントニ・ガウディ列福運動協会)

私書箱 : Apartado de Correos 24094
08080 Barcelona, SPAIN

列福運動にあなたのご協力が必要です。上記の住所または下記の口座で寄付を受け付けております。

スペイン国内から送金の場合

銀行名 : LA CAIXA

口座の種類 : Cuenta corriente (当座預金)

口座番号 : 2100.0810.29.0200674014

国際送金の場合

受取人 : ASSOCIACIÓ PRO BEATIFICACIÓ D'ANTONI GAUDÍ

受取人住所 : APARTADO DE CORREOS 24094, BARCELONA

郵便番号 : 08080 国名 : SPAIN

銀行名 : LA CAIXA D'ESTALVIS I PENSIONS DE BARCELONA

BIC (SWIFT) コード : CAIXESBBXXX

IBAN コード : ES62-2100.0810.2902.0067.4014

ご協力に感謝いたします。

参考文献

ガウディに関する書籍は多数ありますが、特にこちらの本をお勧めいたします。

Rafael Álvarez Izquierdo, GAUDÍ, ARQUITECTO DE DIOS 1852-1926 (ガウディ 神の建築家 1852-1926), Palabra (P.º de la Castellana, 210; 28046 Madrid), 2.ª ed., 1999.

Joan Bassegoda Nonell, EL SENYOR GAUDÍ (ガウディ氏), Claret, Barcelona, 2001.

Joan Bassegoda Nonell, GAUDÍ (ガウディ), Salvat, Barcelona, 1982 y 2001.

Lluís Bonet i Armengol, LA MORT DE GAUDÍ i EL SEU RESSÓ A LA REVISTA «EL PROPAGADOR DE LA DEVOCIÓ DE SAN JOSÉ» (ガウディの死と雑誌『聖ヨセフによる献身の普及者』における彼の反響), Claret, Barcelona, 2001.

Lluís Bonet i Armengol, LA MORT DE GAUDÍ i EL SEU RESSÓ EN ELS DIARIS i REVISTES DE L'ÈPOCA (ガウディの死と当時の新聞・雑誌における彼の反響), Claret, Barcelona, 2000.

Juan Matamala, MI ITINERARIO CON EL ARQUITECTO (私が建築家ガウディとともに歩んだ道), Claret, Barcelona, 1999.

Josep F. Ràfols, GAUDÍ 1852-1926 (ガウディ 1852-1926), Claret, Barcelona, 1999 (facsimil de la edició de 1952)

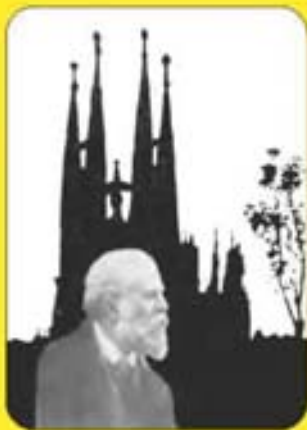
Josep Maria Tarragona, GAUDÍ, BIOGRAFIA DE L'ARTISTA (芸術家ガウディの伝記), Proa, Barcelona, 1999.

Josep Maria Tarragona, GAUDÍ, UN ARQUITECTO GENIAL (天才建築家ガウディ), Casals, Barcelona, 2001.

外尾悦郎『ガウディの伝言』光文社新書 2006.

Etsuro Sotoo y José Manuel Almuzara, DE LA PIEDRA AL MAESTRO (石から巨匠へ), Palabra, Barcelona, 2010.

Associació pro Beatificació d'Antoni Gaudí (ed.), HACIA LA BEATIFICACIÓN DE ANTONI GAUDÍ (アントニ・ガウディの列福を目指して), Barcelona, 2012.



***Associació pro
Beatificació
d'Antoni Gaudí***

アントニ・ガウディ列福運動協会

**私書箱: PO Box 24094
08080 Barcelona SPAIN**